者が非常に多い．これは当初，まったく想定していなかった現象であったが，そういったおひとりさまの参加者は今後もますます増えるだろうと予想している．

というのも，1990年の国勢調査では50歳男性の5.6%，50歳女性の4.3%が一度も結婚歴がなかったが，それが2015年の国勢調査では男性23.4%，女性14.1%と急増している．俗にいう「生涯未婚率」だが，これは今後も増加すると予想されている．さらに現代日本社会は，いよいよ高齢化社会から多死社会に移行しつつある．厚生労働省の『平成29年（2017）人口動態統計の年間推計』によると，2017年の死亡者数は約134万4000人だが，これが2030年頃には年間死者数は150万人を超えて，それが約30年間ほど続くという推計データもある（国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2017年）」）．

この中には，もちろん生涯未婚の死者も多く，無縁仏になってしまう人も多いだろう．そういった社会状況も大阪七墓巡り復活プロジェクトの不思議な人気を後押ししている．

実際に，ある40代後半の独身女性の七墓巡りの参加者から「無縁者の自分が，いま生きているうちに，過去の無縁仏のために供養の 巡礼をする．そうすれば自分が死んで無縁仏になっても，未来の無縁者の誰かが自分のことを思って巡ってくれるかもしれない．過去と現在と未来の無縁者たちが七墓巡りによって時を超えて繋がっていく気がする」と語られたこともあった．

おわりに

血縁，地縁，社縁などが崩壊して無縁化社会が進行していくが，こうした社会状況であるからでこそ，無縁ということを大前提に繋がりあえる仕組みが必要なのではないかと筆者は考えている．大阪七墓巡り復活プロジェクトはそのための試みであり，社会実験である．

参考文献
1）近松門左衛門：『賀古教信七墓廻』（正本近松全集4，近松書誌研究会編，1978）
2）『今宮町誌』（大阪府西成郡今宮町残務所編纂，1926）
3）『郷土研究 上方』「上方探墓號」（南木芳太郎編，1935）

●特集●　公共圏における多声性

公共圏としてのミュージアム

山本桃子

本稿ではミュージアムの公共圏，すなわち対話の場としての活用について検討する．国内外の大学博物館の事例からミュージアムにおける教育とコミュニケーションのあり方を考察し，「教育するもの」「されるもの」という垂直的関係性ではなく，「個人の意見や学びを全体に共有するファシリテーター」と「学習の主体」という水平的関係性でミュージアムの教育を捉えなおす．

1　はじめに

近年，国境を越えた人々の移動はますます活発になっている．我が国における訪日外国人数は過去数年で約3倍に増加し，在留外国人数も約1.3倍に増えている[1]．異なる文化的背景を持った人たちと共生する社会の実現が求められる一方で，対面でのコミュニケーションの機会は必ずしも増えているとは言い難い．インターネット上での匿名でのやり取りや細分化されたコミュニティ内でのコミュニケーションが容易になる一方で，異なる考えを持つ人びとが意見を交換し，互いの価値観について想像を巡らせる場は多くはない．

そこで，本稿では公共施設であるミュージアム[2]を対話の場とし，公共圏としてのミュージアムについて検討する．そのために，文化人類学者である吉田憲司の「フォーラムとしてのミュージアム」という概念を起点として，国内外の大学博物館の教育普及活動を分析する．フォーラムとしてのミュージアムとは，吉田がグローバル・ミュージアム[3]のあり方について述べた際に用いられた概念で「未知なるものに出会い，そこから議論が始まる場所」であり，「そのミュージアムには，双方向的な対話性が必須のものとして要求[4]」される．

●やまもと・ももこ●
1991年生まれ．静岡県出身．早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程教育基礎学専攻在籍．専門：博物館教育学．2014年よりJPタワー学術文化総合ミュージアムインターメディアテクにて学生ボランティアとして活動．

2　公共圏としてのミュージアム

現代において，ミュージアムは図書館や公民館等と並ぶ公共施設として広く社会に認知されてはいるものの，欧米に比べ日本では「公共圏」として社会的に充分に認知されているとは言い難い．ここでの「公共圏」とは，ハーバーマスと齋藤純一による解釈を引用する．ハーバーマスは，宮廷が都市へとその規模を拡大した過程を文化の受容層の拡大を交えて論じ[5]，支配層に限定されていた文化財の大衆化を公共圏の成立の契機とした（文芸的公共性[6]）．

また，斎藤は公共圏を「特定の人びとの間

キーワード：ミュージアム（museum），対話（dialogue），相互作用（interaction），大学博物館（university museum），教育と学習（education and learning）
著者連絡先：momoko.ymmt@gmail.com